

鼻炎用内服薬

製品群No. 69

ワークシートNo.42

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	I 用法用量	J 効能効果	
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ				薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)				症状の悪化につながるおそれ
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
抗ヒスタミン成分	塩酸ジフェニルピラリン	抗ヒスタミン作用及び抗アセチルコリン作用		中枢神経抑制剤・アルコール・モノアミン酸化酵素阻害剤(相互に作用を増強)		ショック、アナフィラキシー様症状(頻度不明)	0.1~5%未満(眼痛、頭痛、頻度不明(排尿困難、めまい、けん怠感、神経過敏、口渇、悪心・嘔吐、下痢、便秘、嗜眠嗜食困難)、自動車の運転等危険を伴う機械の操作)	頻度不明(過敏症)		本剤の成分過敏症の既往歴のある患者、緑内障(眼圧を上昇)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(排尿困難、尿閉等)	高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人				通常成人1回1~2回(塩酸ジフェニルピラリンとして2~4mg)を1日1~2回皮下又は筋肉内注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症、小児ストロフルス、薬疹、じん麻疹)、アレルギー性鼻炎、感冒等上気道炎に伴うくしゃみ・鼻汁・咳嗽	
	α-マレイン酸クロルフェニラミン	抗ヒスタミン作用		中枢神経抑制剤・アルコール・MAO阻害剤・抗コリン作用を有する薬剤(相互に作用を増強)、ドロキドパ、ノルエピネフリン(血圧の異常上昇)	痙攣・錯乱・再生不良性貧血・無顆粒球症(頻度不明)	ショック(頻度不明)	5%以上又は頻度不明(鎮静、神経過敏、頭痛、焦燥感、複視、眠気、不眠、めまい、耳鳴、前庭障害、多幸症、情緒不安、ヒステリー、振戦、神経炎、協調異常、感覚異常、霧視、口渇、胸やけ、食欲不振、悪心、嘔吐、腹痛、便秘、下痢、頻尿、排尿困難、尿閉等低血圧、心悸亢進、頻脈、期外収縮、鼻及び気道の乾燥、気管分泌液の粘性化、喘鳴、鼻閉、溶血性貧血、肝機能障害(AST(GOT)・ALT(GPT)・ALPの上昇等)、悪寒、発汗異常、疲労感、胸痛、月経異常、0.1%未満(血小板減少)、眼気を	5%以上又は頻度不明(過敏症)		本剤の成分又は類似化合物に対し過敏症の既往歴のある患者、緑内障(緑内障の増悪)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(症状の増悪)、低出生体重児、新生児(痙攣等の重篤な反応があらわれるおそれ)	眼内圧亢進、甲状腺機能亢進症、狭窄性消化性潰瘍、幽門十二指腸通過障害、循環器系疾患、高血圧症、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人				α-マレイン酸クロルフェニラミンとして、通常、成人には1回2mgを1日1~4回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	じん麻疹、血管運動性浮腫、枯草熱、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症、薬疹)、アレルギー性鼻炎、感冒等上気道炎に伴うくしゃみ・鼻汁・咳嗽。	

鼻炎用内服薬

製品群No. 69

ワークシートNo.42

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化等に伴う使用環境の変化
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
抗ヒスタミン成分	メキタジン	ゼスラン錠	ケミカルメディエーター拮抗作用、抗ヒスタミン作用、抗アレルギー作用		中枢神経抑制剤・アルコール(眠気)、抗うつ剤・MAO阻害剤・アトロピン様作用を有する薬剤(口渇、排尿困難)、メトキサレン(光線過敏症)	肝機能障害、黄疸・血小板減少(頻度不明)	ショック、アナフィラキシー様症状(頻度不明)	0.1~5%未満(眠気、けん怠感、ふらふら感、口渇、胃部不快感)、0.1%未満(AST(GOT)、ALT(GPT)の上昇、血小板減少、頭痛、めまい、下痢、便秘、食欲不振、嘔吐、胃痛、腹痛、胸部苦悶感、心悸亢進、排尿困難、咽頭痛、浮腫、顔面潮紅、視調節障害、月経異常、味覚異常、口内しびれ感)、頻度不明(黄疸)、自動車の運転等危険を伴う機械の操作。	0.1%未満(過敏症)		本剤の成分、フェノチアジン系化合物及びその類似化合物に対し過敏症の既往歴、緑内障(緑内障を悪化)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(排尿困難等)	腎障害、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳婦、低出生体重児、新生児、乳児、幼児又は小児					1.通常成人1回メキタジンとして6mgを1日2回経口投与する。なお、年齢、症状に応じて適宜増減する。 2.通常成人1回メキタジンとして3mgを1日2回経口投与する。なお、年齢、症状に応じて適宜増減する。	1.気管支喘息、2.アレルギー性鼻炎、じん麻疹、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症)
血管収縮成分	塩酸ブソドエフェドリン	なし																

鼻炎用内服薬

製品群No. 69

ワークシートNo.42

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効果効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			
			併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量以上 過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ		
血管収縮成分	塩酸フェニレ フリン	ネオンネジ ンコーワ注1 号	塩酸フェニレ フリンは選択 的α <sub>1</sub> 刺激薬 である。	MAO阻害剤(MAO阻害薬で 治療中又は治療後3週間以 内の患者: 血圧の異常上 昇)、三環系抗うつ剤・分曉 促進剤(本剤の作用が増強)			0.1~5%末 満(胸内苦 悶、呼吸困 難、頭痛、悪 心・嘔吐、手 足のしびれ 感、手足のふる え感、紅疹)、頻度不明(心悸亢 進、徐脈、血 圧異常上昇、 発汗)	頻度不明(過 敏症)		原則禁忌: 心室性 頻拍(症状を悪 化)・本剤の成分過 敏症の既往歴			過量投与 徴候・症状: 心 室性期外収縮、 一過性の心室性 頻拍、頭暈感、 手足の疼痛、脳 出血、頭痛、肺 水腫等の症状が あらわれる。		皮下注射及び筋肉内注射 通常成人1回2~5mg を皮下注射又は筋肉内注射 する。なお、年齢、症状 により適宜増減するが、そ の範囲は1~10mgとし、初 回量は5mgを超えないこ と。また、反復投与を行う 場合には、10~15分おき に行うこと。 [静脈内注射] 通常成人1 回0.2mgを注射液そのま ま、又は約10mLの生理食 塩液、リンゲル液、若しく は5%ブドウ糖液等に混入 して静脈内注射する。な お、年齢、症状により適宜 増減するが、その範囲は 0.1~0.5mgとする。また反 復投与を行う場合には10 ~15分おきに行うこと。 [点滴静脈内注射] 100mL の血液、リンゲル液又は 5%ブドウ糖液等に対し、0.5 ~1.0mgの割合で混入し、 血圧を測定しながら滴数 を加減して点滴静注する。 [局麻時の作用延長] 通常 、20mLの局所麻酔剤に 対して1mgの割合で混入し て使用する。 高齢者減量	各種疾患若しくは状態に伴う急性低血圧又はショック時の補助治療、発作性上室頻拍、局所麻酔時の作用延長

鼻炎用内服薬

製品群No. 69

ワークシートNo.42

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果				
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果		
		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ			
副交感神経遮断成分	ベラドンナ総アルカロイド	硫酸アトロピン	ムスカリン性アセチルコリン受容体に対する競合的遮断薬	抗コリン作用を有する製剤(三環系抗うつ剤・フェノチアジン系薬剤・イソニアジド・抗ヒスタミン剤等を経口用剤として用いる場合)[相加的に抗コリン作用増強]、MAO阻害剤(経口用剤として用いる場合)[抗コリン作用増強]、強心配糖体製剤(経口用剤として用いる場合)[強心配糖体製剤の毒性を増強]、眼科用剤・三環系抗うつ剤、フェノチアジン系薬剤、抗ヒスタミン剤(本剤の作用増強)	経口剤：頻度不明(散瞳、視調節障害、緑内障、口渇、悪心・嘔吐、嚥下障害、便秘、排尿障害、頭痛、頭重感、記銘障害、心悸亢進、呼吸障害、顔面潮紅)、眼科用剤：頻度不明(続発性緑内障、眼圧上昇、血圧上昇、心悸亢進、幻覚、痙攣、悪心・嘔吐、口渇、便秘、顔面潮紅、頭痛、発熱)、視調節障害・麻痺、散瞳のため自動車運転等危険を伴う機械の操作	経口剤：頻度不明(過敏症)、眼科用剤：頻度不明(アレルギー性結膜炎、眼瞼結膜炎)	緑内障(病状の悪化)、前立腺肥大による排尿障害(症状の悪化)、麻痺性イレウス(症状の悪化)、本剤に対し過敏症の既往歴、眼科用剤：緑内障および狭隅角や前房が浅いなどの眼圧上昇の素因(急性閉塞隅角緑内障の発作)	前立腺肥大、うつ血性心不全、重篤な心疾患、潰瘍性大腸炎、甲状腺機能亢進症、高温環境、高齢者、妊婦、授乳婦、小児・乳児(眼科用剤では全身副作用が起こりやすい)					(眼科用剤)長期にわたり散瞳しているため虹彩が癒着	経口剤：硫酸アトロピンとして、通常、成人1日1.5mgを3回に分けて経口投与、非薬物性パーキンソンズムの場合には、硫酸アトロピンとして、通常、成人最初1日0.5～1mgを3回に分けて経口投与し、以後漸次増量。眼科用剤：硫酸アトロピンとして、通常、0.5～1%液を1日1～3回、1回1～2滴ずつ点眼	経口用剤：胃・十二指腸潰瘍における分泌ならびに運動亢進、胃腸の痙攣性疼痛、痙攣性便秘、胆管・尿管の痙攣、有機リン系殺虫剤・副交感神経興奮剤の中毒、迷走神経性徐脈及び迷走神経性房室伝導障害、夜尿症、その他の徐脈及び房室伝導障害、非薬物性パーキンソンズム、麻酔前投薬 眼科用剤：診断または治療を目的とする散瞳と調節麻痺
消炎解熱成分	塩化リゾチーム	レフトーゼ錠	抗炎症作用：瘢痕形成・組織修復作用：膿液の分解と排出作用：出血抑制作用	ショック、アナフィラキシー様症状・S-J症候群・Lyell症候群(頻度不明)	0.1～5%未満(下痢、胃部不快感、悪心・嘔吐、食欲不振)、0.1%未満(口内炎等)、頻度不明(肝機能障害(AST(GOT)、ALT(GPT)、Al-P、γ-GTP、LDHの上昇等、めまい)	0.1%未満(過敏症)	本剤の成分過敏症の既往歴、卵白アレルギー(アナフィラキシー・ショックを含む過敏症状)	アトピー性皮膚炎、気管支喘息、薬剤アレルギー、食物アレルギー等のアレルギー性素因、両親、兄弟等がアレルギー症状の既往歴、高齢者				作用機序は解明されていない点も多く、用量・効果の関係も必ずしも明らかでないため、漫然と投与しない。	1.慢性副鼻腔炎の腫脹の緩解、痰の切れが悪く、喀出回数が多い気管支炎、気管支喘息、気管支拡張症の喀痰喀出困難、小手術時の術中術後出血の場合、通常、成人は1日塩化リゾチームとして、60～270mg(力価)を3回に分けて経口投与する。2.歯槽膿漏症(炎症型)腫脹の緩解の場合、通常、成人は1日塩化リゾチームとして、180～270mg(力価)を3回に分けて経口投与する。高齢者減量	1.慢性副鼻腔炎の腫脹の緩解、痰の切れが悪く、喀出回数が多い気管支炎、気管支喘息、気管支拡張症の喀痰喀出困難、小手術時の術中術後出血(歯科、泌尿器科領域)の場合、2.歯槽膿漏症(炎症型)腫脹の緩解の場合	

鼻炎用内服薬

製品群No. 69

ワークシートNo.42

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 蓋用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化			
			併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ				
消炎 酵素 成分	セラペプター ゼ	ダーゼン5 mg錠	・抗腫脹作用 ・喀痰・膿汁 の融解・排泄 促進作用		抗凝血剤(抗凝血剤の作用 が増強)	間質性肺炎、 PIE症候群、 AST(GO T)、ALT(G PT)の上昇 等を伴う肝機能 障害、黄疸 (0.1%未 満)	皮膚粘膜眼 症候群(Stev ens-John son症候群) 及び中毒性 表皮壊死症 (Lyell症候 群)、ショッ ク、アナフィ ラキシー様症 状(0.1%未 満)	0.1~5% 未満(食欲不 振、胃部不快 感、悪心、嘔 吐)、0.1% 未満(下痢、 鼻出血、血痰 等の出血傾 向)	0.1~5% 未満(過敏症)		本剤の成分過敏 症の既往歴	薬物過敏症の既往 歴、血液凝固異 常、重篤な肝障害 又は腎障害				作用機序は 解明されてい ない点も多 く、用量・効 果の関係も 必ずしも明ら かにされてい ないので、漫 然と投与しな い。		セラペプターゼとして、通 常成人1日15~30mgを 1日3回に分けて毎食後に 経口投与する。なお、年 齢・症状に応じて適宜増減 する。製剤別の通常成人 用法・用量は次のとおりで ある。 ◇ダーゼン5mg錠:1回1 ~2錠宛、1日3回毎食後 経口投与 ◇ダーゼン10mg錠:1回 1錠宛、1日3回毎食後に 経口投与 ◇ダーゼン顆粒1%:1回 0.5~1g宛、1日3回毎 食後に経口投与 本剤の体内での作用機序 はなお解明されていない 点も多く、また、用量・効果 の関係も必ずしも明らか にされていない。従って漫 然と投与すべきでない。		手術後及び 外傷後、慢性 副鼻腔炎、乳 汁うっ滞(乳房 マッサージ及 び搾乳を行っ ている場合)の 症状の腫脹の 緩解 ・気管支炎、肺 結核、気管支 喘息時の喀痰 咳出困難 ・麻酔後の喀 痰咳出困難
抗 炎 成 分	グリチルリチ ン酸二カリウ ム	点眼のみな ので、グリチ ルリチン酸 モノアンモニ ウム・グリチ ロン注一号 を使用	抗炎症作用		ループ利尿剤・チアジド系お よびその類似降圧利尿剤 (低カリウム血症)、甘草(偽 アルドステロン症)	偽アルドステ ロン症(頻度 不明)、横紋 筋融解症(グ リチルリチン 酸または甘 草を含有する 製剤)					偽アルドステロ ン症、ミオパシー、低 カリウム血症(低カ リウム血症、高血 圧症等を悪化)	高齢者、妊婦小児 等			長期運用に より偽アルド ステロン症		グリチルリチンとして、通 常成人1日1回40mgを皮下 注射する。なお、年齢、症 状により適宜増減する。		薬疹	

鼻炎用点鼻薬

製品群No. 70

ワークシートNo.43

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果						
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果
血管収縮成分	塩酸テトラヒドロソリン ABCスプレー点鼻薬、塩酸塩がなく、硝酸塩を使用	直接局所粘膜に適用すれば粘膜炎の充血、腫脹を除去する。  血圧上昇作用はエビネフリンと類似であり、作用の発現はエビネフリンより遅	モノアミン酸化酵素阻害剤(急激な血圧上昇)		頻度不明(傾眠、頭痛、めまい、振戦、不眠症、脱力感、血圧上昇、心悸亢進、不整脈、熱感、乾燥感、反応性充血、鼻漏、長期使用で反応性の低下等)	頻度不明(過敏症)		本剤に対し過敏症の既往歴・2歳未満の幼児・乳児(全身症状)・ノアミン酸化酵素阻害剤を投与中(急激な血圧上昇)	冠動脈疾患、高血圧症、甲状腺機能亢進症、糖尿病、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児	連用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すことある。小児において、過量投与により、急性充血期に陥って使用するか又は適切な休薬期間をおいて使用すること。			連用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すことある。	連用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すことある。		本剤は原則として6歳以上の小児及び成人に用いる。通常、成人3～5時間毎に2～3回鼻腔内に噴霧するか、又は2～4滴を鼻腔内に点鼻する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	上気道の諸疾患の充血・うっ血
	塩酸ナファゾリン	0.05%プリピナ液「チバ」、塩酸ナファゾリンの配合剤しかなかったため、硝酸ナファゾリンの点鼻薬を用いた	血管平滑筋のα-アドレナリン受容体に直接作用して血管を収縮させる。アドレナリンより強い末梢血管収縮作用を有し、作用持続時間も長い(ウサギ耳殻血管)。	MAO阻害薬(急激な血圧上昇)	頻度不明(眼気等の鎮静作用(特に小児)、神経過敏、頭痛、めまい、不眠症、血圧上昇、悪心・嘔吐、熱感、乾燥感、嗅覚消失、反応性充血、長期投与で顆粒球減少・反応性の低下)	頻度不明(過敏症)	本剤の成分に対し過敏症の既往歴・2歳未満の乳・幼児(ショック)、MAO阻害剤の投与を受けている(急激な血圧上昇)	冠動脈疾患、高血圧症、甲状腺機能亢進症、糖尿病、交感神経作用薬による不眠・めまいなどの既往、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児	連用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すことある。小児においては、急性充血期に陥って使用するか又は適切な休薬期間をおいて使用すること。	眼科用として使用しないこと。過量投与により、主なる全身作用として、血圧上昇と二次作用として臓器虚血がみられる。幼・小児では過量投与により、顕著な鎮静があらわれ、発汗、徐脈、昏睡等の全身症状があらわれやすい。連用・頻回投与により顆粒球減少、反応性の低下、局所粘膜の二次充血を起すことがある。			連用・頻回投与により顆粒球減少、反応性の低下、局所粘膜の二次充血を起すことがある。		通常、成人鼻腔内には、1回2～4滴を1日数回、咽頭・喉頭には1回1～2mlを1日数回塗布又は噴霧する。なお、年齢、症状により適宜増減する。局所麻酔剤への添加には、局所麻酔剤1mlあたり0.05%液2～4滴の割合で添加する。	上気道の諸疾患の充血・うっ血、上気道粘膜の表面麻酔時における局所麻酔剤の効力持続時間の延長	
	塩酸フェニレフリン	ネオシネジレンコーフ5%点眼液、点鼻薬がなく点眼薬を使用	塩酸フェニレフリンは選択的α1受容体刺激作用薬である。健康成人における散瞳は迅速であり、また、通常5～6時間で正常に復	MAO阻害薬(急激な血圧上昇)、三環系抗うつ薬(急激な血圧上昇)、シクロプロパン、ハロタンなどで全身麻酔する前には、本剤の投与を休止する	頻度不明(結膜炎、眼圧上昇、血圧上昇、心悸亢進、不眠症、脱力感、血圧上昇、悪心・嘔吐、熱感、乾燥感、嗅覚消失、反応性充血、長期投与で顆粒球減少・反応性の低下)	頻度不明(過敏症)	狭隅角や前房が浅いなどの眼圧上昇の薬因(急性閉塞隅角緑内障の発作)	高血圧症、動脈硬化症、冠不全または心不全などの心臓疾患、糖尿病または甲状腺機能亢進症、小児、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人		長期にわたる散瞳は虹彩が癒着するという報告がある(点眼の注意)					通常1回、1～2滴宛点眼する。	診断または治療を目的とする散瞳	
抗ヒ	塩酸イプロヘブチン	なし															

鼻炎用点鼻薬

製品群No. 70

ワークシートNo.43

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化	
										使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの							
スタミン成分	マレイン酸クロロフェニラミン 外用がないのでポララミン錠2mgを使用	抗ヒスタミン作用	中枢神経抑制剤・アルコール・MAO阻害剤・抗コリン作用を有する薬剤(相互作用を増強)、ドロキシドパ、ノルエピネフリン(血圧の異常上昇)	痙攣・錯乱・再生不良性貧血・無顆粒球症(頻度不明)	ショック(頻度不明)	5%以上又は頻度不明(鎮静、神経過敏、頭痛、焦燥感、複視、眠気、不眠、めまい、耳鳴、前庭障害、多幸症、情緒不安、ヒステリー、振戦、神経炎、協調異常、感覚異常、霧視、口渇、胸やけ、食欲不振、悪心、嘔吐)	5%以上又は頻度不明(過敏症)	本剤の成分又は類似化合物に対し過敏症の既往歴、結内腫(増悪)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(増悪)、低出生体重児・新生児(産後)に重篤な反応があらわれるおそれ	眼内圧亢進、甲状腺機能亢進症、狭窄性消化性潰瘍、幽門十二指腸通過障害、循環器系疾患、高血圧症、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人				マレイン酸クロロフェニラミンとして、通常、成人には1回2mgを1日1~4回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	じん麻疹、血管運動性浮腫、枯草熱、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症、薬疹)、アレルギー性鼻炎、血管運動性鼻炎、感冒等上気道炎に伴うくしゃみ・鼻汁・
抗アレルギー成分	クロモグリク酸ナトリウム	インターール点鼻液	抗原抗体反応に伴って起こるマスト細胞からの化学伝達物質(ヒスタミン等)の遊離を抑制することによってアレルギー性鼻炎の発現を防止する。また、ヒト末梢静脈血由来の炎症性細胞(好酸球、好中球、単球)の活性化に対して抑制作用をもつ。		アナフィラキシー様症状(0.1%未満)	0.1~5%未満(鼻内刺激感)0.1%未満(鼻出血、頭痛)	0.1%未満(過敏症)	本剤の成分に対し過敏症の既往歴	妊婦又は妊娠している可能性のある婦人				1日6回(起床時、日中約3時間ごとに4回、就寝前)、1回各鼻腔に1噴霧(クロモグリク酸ナトリウムとして2.6mg)ずつ噴霧吸入する。症状の緩解が得られれば、その後の経過を観察しながら減量すること。	アレルギー性鼻炎

鼻炎用点鼻薬

製品群No. 70

ワークシートNo.43

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 薬理に基づく 薬理のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化
			併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの				使用量に上 限があるもの	適量使用・誤 使用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
殺菌成分	塩化ベンザ ルコニウム	0.1w/v%チア ミトール水						頻度不明(過 敏症)		粘膜、創傷面または 炎症部位に長 期間または広範囲 に使用しないこと			原液は皮膚・粘 膜に付着及び眼 に入らないように 注意する(刺激性 がある)。・炎症 または易刺激性 の部位(粘膜、 陰股部等)への 使用。正常の部 位への使用より 低濃度とすること が望ましい。また、 使用後は滅菌精製 水で水洗する。・ 深い創傷または 眼に使用する希 釈水溶液は、調製 後滅菌処理する こと。・経口投与 しないこと。・洗 滌には使用しない こと。・密封包装、 ギプス包装、パ ックに使用すると 刺激症状があら われることがある ので、使用しない ことが望ましい。	効能・効果・用法・用量 (塩化ベンザルコニウム濃 度)①手指・皮膚の消毒: 通常石けんで十分に洗浄 し、水で石けん分を十分に 洗い落とす後、塩化ベン ザルコニウム0.05~0.1% 溶液に浸して洗い、滅菌 ガーゼあるいは布片で清 拭する。術前の手洗の場合 には、5~10分間ブラッ シングする。②手術部位 (手術野)の皮膚の消毒: 手術前局所皮膚面を塩化 ベンザルコニウム0.1%溶 液で約5分間洗い、その後 塩化ベンザルコニウム 0.2%溶液を塗布する。③ 手術部位(手術野)の粘 膜の消毒、皮膚・粘膜の 創傷部位の消毒。塩化ベン ザルコニウム0.01~0.025% 溶液を用いる。④感染皮 膚面の消毒。塩化ベンザ ルコニウム0.01%溶液を 用いる。⑤医療用具の消 毒。塩化ベンザルコニウム 0.1%溶液に10分間浸漬す る際は、器具を予め2% 炭酸ナトリウム水溶液で洗 い、その後塩化ベンザルコ ニウム0.1%溶液中で15分 間煮沸する。⑥手術室・病 室・家具・器具・物品など の消毒。塩化ベンザルコ ニウム0.05~0.1%溶液を布 片で塗布・清拭するか、ま たは噴霧する。⑦膿洗浄 。塩化ベンザルコニウム0.02 ~0.05%溶液を用いる。⑧ 結膜囊の洗浄・消毒。塩化 ベンザルコニウム0.01~ 0.05%溶液を用いる。・炎 症または易刺激性の部位 (粘膜、陰股部等)への使 用。正常の部位への使用 より低濃度とすることが望 ましい。		



鼻炎用点鼻薬

製品群No. 70

ワークシートNo.43

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別 に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 に伴う使用 環境の変 化	
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの		使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	
殺菌成分	塩化ベンゼトニウム ハイアミン液、塩化ベンゼトニウム10w/v%	芽胞のない細菌、真菌類に広く抗菌性を有し、グラム陽性菌には陰性菌よりも低濃度で効果を示す。一方、結核菌及び大部分のウイルスに対する殺菌効果は期待できない					頻度不明(過敏症)			原液は皮膚・粘膜に付着及び眼に入らないように注意する。・炎症または易刺激性の部位(粘膜、陰股部等)への使用時は低濃度・経口投与しないこと。・密封包装、ギプス包装、パックに使用すると刺激症状があらわれることがあるので、使用しないことが望ましい。・深い創傷又は眼にしようする場合は希釈液は注射用蒸留水か滅菌精製水を使用	①通常石けんです十分に洗淨し、水で石けん分を十分に洗い落した後、塩化ベンゼトニウム0.05~0.1%溶液(本剤の100~200倍希釈液)に浸して洗い、滅菌ガーゼあるいは布片で清拭する。術前の手洗の場合には、5~10分間ブラッシングする②手術前局所皮膚面を、塩化ベンゼトニウム0.1%溶液(本剤の100倍希釈液)で約5分間洗い、その後塩化ベンゼトニウム0.2%溶液(本剤の50倍希釈液)を塗布する③塩化ベンゼトニウム0.01~0.025%溶液(本剤の400~1,000倍希釈液)を用いる④塩化ベンゼトニウム0.01%溶液(本剤の1,000倍希釈液)を用いる⑤塩化ベンゼトニウム0.025%溶液(本剤の400倍希釈液)を用いる⑥塩化ベンゼトニウム0.02%溶液(本剤の500倍希釈液)を用いる⑦塩化ベンゼトニウム0.1%溶液(本剤の100倍希釈液)に10分間浸漬するか、または厳密に消毒する際には、器具を予め2%炭酸ナトリウム水溶液で洗い、その後塩化ベンゼトニウム0.1%溶液(本剤の100倍希釈液)中で15分間煮沸する⑧塩化ベンゼトニウム0.05~0.2%溶液(本剤の50~200倍希釈液)を布片で塗布・清拭するか、または噴	①手指・皮膚の消毒②手術部位(手術野)の皮膚の消毒③手術部位(手術野)の粘膜の消毒、皮膚・粘膜の創傷部位の消毒④感染皮膚面の消毒⑤洗浄⑥結膜のうの洗浄・消毒⑦医療用具の消毒⑧手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒

鼻炎用点鼻薬

製品群No. 70

ワークシートNo.43

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
抗炎症成分	グリチルリチン酸二カリウム	ノイホルミチン、点鼻薬がなかったため、点眼薬の添付文書を使用					頻度不明(眼の刺激感)	頻度不明(過敏症)							点眼用におのみ使用			通常、1回2～3滴を1日5～6回点眼する。なお、症状により適宜増減する。	アレルギー性結膜炎